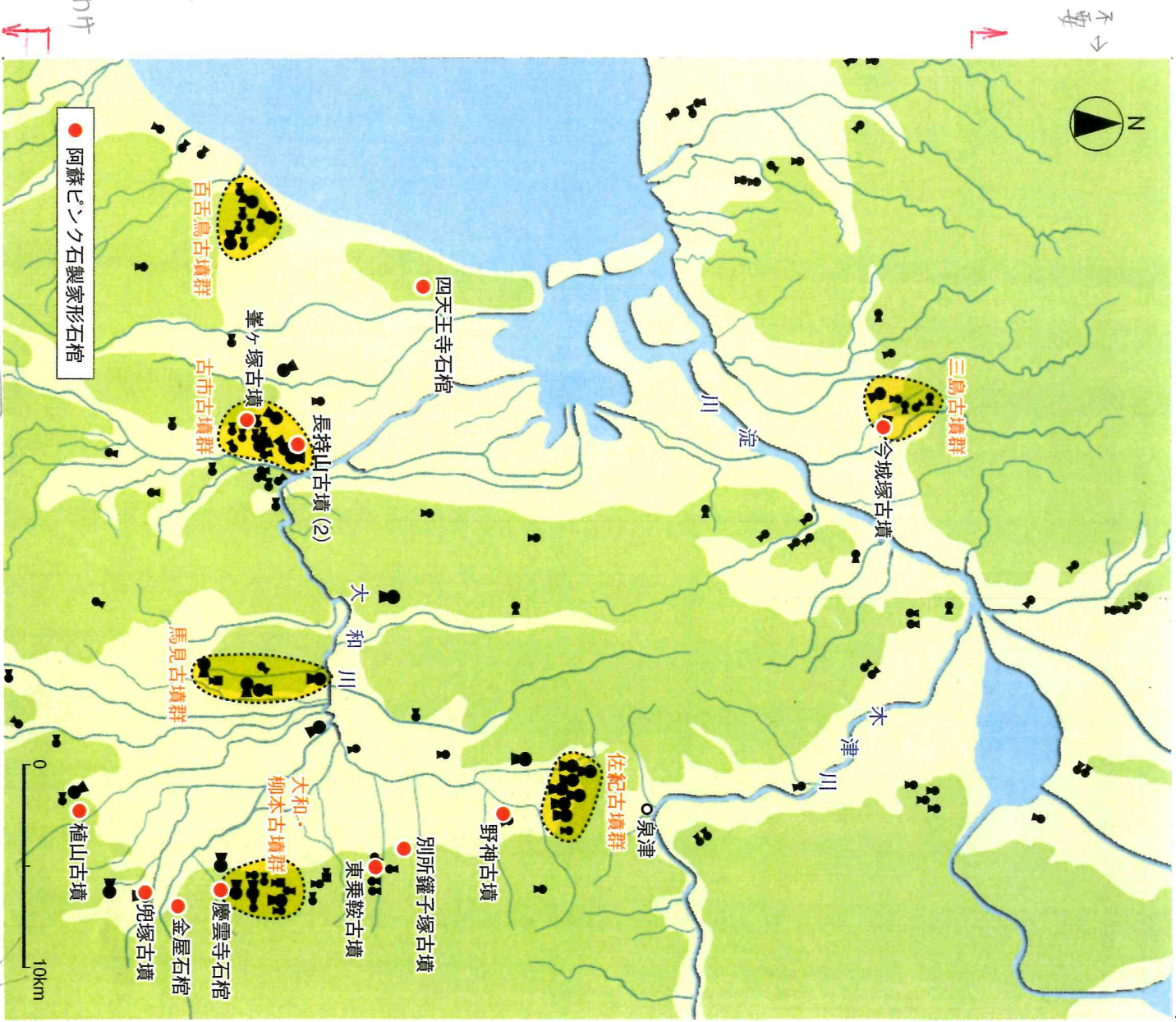


- ・カラー
- ・左頁の上半分に掲載下さい。
- ・上A限度一杯はみ出せて下さい。



2,976^P-13/13

中心の川わけ
13AQ

中心の川わけ
14AQ

第399図 畿内地域における馬門石(阿蘇ビンク石)製家形石棺の分布
『おみかえり大王墓・今城塚古墳』森田克行、新泉社、2011年8月15日発行、42頁参照

2.977^p-1/4

2976-8/13

こと

大阪府高槻市、今城塚古墳の石棺に、熊本県
の阿蘇山の噴火で出た溶結凝灰岩が使われて
いることが分った。
この凝灰岩は、熊本県宇土市を中心とする
九州でしか産出しないもので、ピンク色をし
ているのが特徴である。
ピンク凝灰岩の破片百五十四点か、後内
部の内堀や墳丘で出土し、五点には朱が塗られ
ていた。
そして、そのうちの一点（縦十九センチ、横十
一センチ、厚さ十二センチ）には、家形石棺の蓋の一
部であったことを示すとみられる加工の跡があ
った。
当時、兵庫県高砂産の竜山石が石棺材としては一
般的であったにもかかわらず、わざわざ、宇
土あたりのピンク凝灰岩を近畿まで運んでき
て用いたことになる。
ピンク凝灰岩の石棺材は、これまで十一
例見つかったているが、大王陵級の古墳から出
土したのは初めてである。（写真図版 536・537 参照）

阿蘇山
1100m
3500m
今城塚

2976-8/13

2976-8/13

野洲
植山七郎

今城垣古墳 38P

⑤ 2978°-1/3 3/4
⑥ 2979°-3/3

古墳の発掘 森浩-147°
2行 151出
147° 195表
2行 195表

表 1585(元)

2977°-3/4

すなわち、
へ今城塚古墳は、継体天皇陵として築かれ
たのではあるまい。✓
と推察される。

次いで、天皇陵としては最後の前方後円墳
である敏達天皇を見てもよい。

天皇(五八五(紀))の陵

畿内地方では、六世紀後半のこの当時、天
皇陵をはじめとする全ての古墳が規模を縮小
しつつあったと現在考えられている。

ところが敏達陵の墳丘の型式は、古墳時代後期(六世
紀)のものとするにはあまりにも整然としてお
り、均斉がとれている。

くび小部の両側には、造出(もあつて、古
墳型式編年からみれば、敏達陵は五世紀ころ
の型式である。

古墳時代中期(五世紀)

そしてまた、この敏達陵には、どうしたわけ

・ 頁の右上 (1/4)。
 ・ 限定一杯大玉はみ出し7掲載下さい。

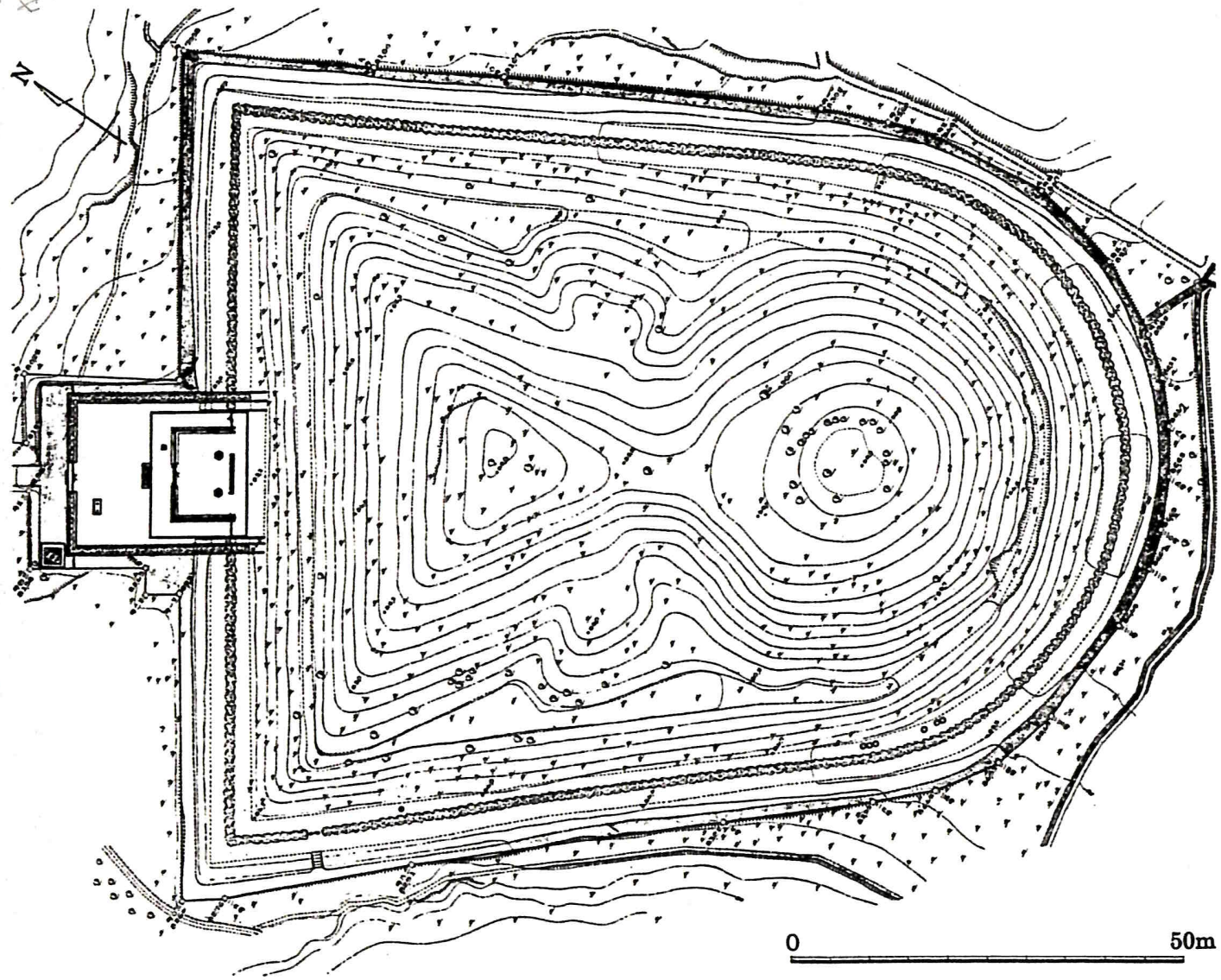
敏達天皇の字表は
 「女帝御姓一掛御名即世と治世」
 21頁にカラーがある。
 ・ 1か1. 丘 傍に木々がみえ、
 形は不明瞭でない。

2,977-4/4

* 著作権許諾は、
 不要です。

13QG

・ 女帝誕生。
 ・ 推古天皇の
 即位と治世』
 大3町立竹内街道
 歴史資料館 平放
 19年9月27日発行
 21頁のカラー写真(古墳の車輪部がはつきりない)参照



436

2001 上 敏達天皇陵是處は不明瞭

13QG

14QG

第400回

敏達天皇陵 (宮内庁書陵部提供)

12QG ↑ 大阪府太子町
 右70m

『近畿の古墳と古代史』白石太郎 学生社、2007年5月30日発行、154頁。
 12QG 墳丘長約93m。後円部と前方部の高さがほぼ同一で、その間の車輪部がきわめて高い。

改訂

けか円筒埴輪かたて並べられてゐるか、円筒埴輪を採用するのは、畿内ではほぼ六世紀初頭までである。

つまり、敏達陵とされてゐる前方後円墳の墳丘があまりにも立派であり、また円筒埴輪が樹立されてゐることからみて、――実はこの墳丘は、本来の敏達陵でなく、半世紀―一世紀半ほど時代がさかのぼった頃に作られた別人の墓なのではなからうか、といひかけてゐる。

・「か」一方、
「墳丘」の変遷は信ずるに足らない。後の時代に例えは敏達陵のばあい六世紀後半以後に、古来の伝統の墳丘を築くことがある。とする見方もある。(「古墳の発掘」森浩一 中公新書、一四五―一四七頁)「古墳時代」

(上)河出書房、ハ〇頁参照
「ま」さういふと、なのだろう。

「この物語では」
へ聖徳太子への金人の夢告以後、つまり七世紀以後に、現代の古墳型式編年では、五

世紀ころの型式をもつ墳丘を築き、古い型式の円筒埴輪を樹て並べて、これを後

代の天皇の直系の祖先である敏達天皇の陵墓とした。

紀下 292⁵⁷² 573⁷ 234¹ (人々) 当時 次頁 09

2.978⁷-3/3

2979⁷-3/3 継体 5世紀中 3/3 2979⁷-3/3

2975⁷-1/2 根底から揺る 7斤

と考えてみたい。

ともあれ、現在作られている^{おうじん} 応神・仁徳陵を^{だんじり} 原点とする^{じん} 古墳型式編年^{じん} は、根本から見^み

直す必要があるようだ。

すなわち、

へ^{おうじん} 応神・仁徳・允恭・継体・敏達陵などは^{じん}

七世紀頃^{じん} 作られたにもかかわらず、

後の代の学者達加、これらの陵墓を四世紀末^{まつ}

五世紀ころのものだ。

とする古墳型式編年を作ってしまっただけ^{じん}

なのだろう、と想到される。

なお、よく知られているように、孝徳天皇^{こうとく}

の大化二年(六四六)三月二十二日に^{じん} 薄葬

の詔^{みことり} が出された^だ。

この時点迄、日本国中が葬儀^{そうぎ} の為^{ため} に多大^{ただい} の労

力を費^{つぎや} して来たからこそ、^{じん} 薄葬^{はくそう} の詔^{みことり} が

発せられ、石室や墳丘の大きな^{じん} 葬具^{そうぐ} ・役

夫^ふ などが大幅に規制された、と解^{かい} される。

ここに、皇族である^{みこたち} 王より以上^{かみづかた}

を^を 全^{ぜん} ての者達の墓^{はか} が^{じん} こぢんまりとした^も

(孝徳記大化二年三月条参照)

見直す 必要があるように思われる。 ようだ。

11472
自主的 自発的

2,978^P-3/3

ほうだい 元
大 浮 かす 176P
みんた 紀下572上
敬王より

更に引き続いて、新城（平城京）を築城しようとしたこの当時、

では、聖徳太子が金人の夢告を得られた時（七世紀前半）以後の諸天皇の陵は、どのようになつたのだろうか。

へ心神・仁徳陵をはじめとする数多くの巨大な陵墓を次々と造営し、聖徳太子以降の各天皇陵の規模もまた大幅に縮小されたと想像される。（第一表参照）

参考迄に述べると、孝徳朝の日薄葬の詔によつて、

「天皇の地位を絶対化し、諸豪族を新しく

秩序化しようとしたのであろう」とみる説がある。（以下「日本書紀」(F) 日本書典

文学大系、岩波書店、五七二頁補注二五―二三参照）
だが、役夫の人数や日数など、――秩序化

の爲だけならば不必要と思えることまでも、
実にこまごま規定してゐるところを見ると

へこうして、王たち以上天皇をも含む全ての者の墓を制限して浮かせた巨大な役夫や日数

などを、――心神・仁徳陵等々の諸天皇陵の造営のみならず、割り振ったのであろう

と推察される。
新に始まる。新（平城京）建設の方へ

「結果」次頁8行

②

④ 2910^p-1/3

2.979^p-1/3

川西宏幸氏 次頁 ④ 2979^p-2/3 2行 (黄色) 末 仁徳陵
④ 2909^p-2/3 既述

なるほど、心神・仁徳陵をはじめとする天
皇陵に、古く形式の円筒埴輪を樹て並べたの
は、たいした見識であつたといえよう。
■とはいへ、後代(つまり現代)の研究者が
円筒埴輪を全国的な規模で検討、時代順に並
べて緻密な編年を作り上げようなどは、墳
丘築造当時、とうてい考え至らなかったに違
ひない。
■そこで、ただやみくもに、古く形式の円筒
埴輪を樹て並べたものと想像される。(※あるい
は他の古墳の埴輪を移し置いたのだろうか)
■そうしたわけで、たとえば仁徳陵も
「仁徳天皇(一四二七年)の陵を原案とす
る古墳型式の編年」
にあつてはめてみると
① 当然、仁徳天皇陵の墳丘自体は五世紀初頭
ころの形態をもつていて、まさにぴたりと、
現在の「古墳型式編年」に合致する。
② 一か、仁徳陵出土の円筒埴輪は、五世紀
中葉または後葉の頃の編年に対応している。
③ ちよちよな
というところになつたのであろう。ハ「朝日新
聞」昭和五十四年二月十一日付、川西宏幸氏の

論文参照(第四十八章へ仁徳天皇の陵)の項
において既述)

また、~~仁徳陵の東側造出し「豪近く」で須恵~~

器の大甕が見い出された

という。(写真図版へ仁徳陵出土の大甕参照既述)

近年、仁徳陵の壕の整備工事中に須恵器の
甕が発見された結果、須恵器の編年からみ

て、仁徳陵は、五世紀後半から六世紀にかけ

てつくられたのではなからうか

という修正学説が出された

付、大塚初重、参照。第四十八章へ仁徳天皇
の陵の項において既述)

も、かいたら、~~仁徳天皇陵を築造の際に~~

五世紀後半から六世紀にかけてつくられた須

恵器が、東側造出し「豪近く」に据え置かれた

のかも知れない

の大甕

*

2979^{P-3/3} 赤勢太
 允恭・継体 5世紀中 2978^{P-1/2} 秋
 敏達 5世紀前半 2976^P 末2行
 敏達陵 1146^P の末参照
 ② 2974^P 2行~3行
 赤・イニは 4世紀末~5世紀初め
 ③ 2976^{P-1/2} 9行 継体・允恭は 5世紀中ごろ
 ④ 2977^{P-3/3} 18行 敏達陵は 5世紀

2次頁から

と想到される。

ゴキニート下さい

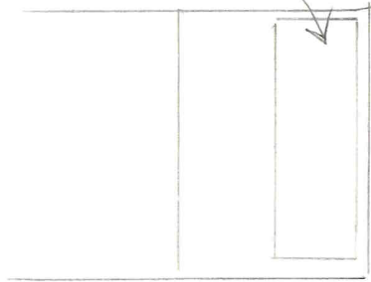
① 聖徳太子以前 天皇陵は悉く
 人の夢告以後 近畿地方へ遷された
 のであらう。
 ② そうしたわけで、
 穴神・仁徳・允恭・継体・敏達陵などは
 ほぼ同じような時期の古墳型式編年（今日の
 見方でいえば4世紀末~5世紀ころ）を示
 すのであらう

に築かれた北九州地方の

全7
 ⑤ 2980^{P-3/3} 2行

・文字は全て、ゴシック。

・右頁の右側半分(縦長)に、
上下を限度一杯はみ出させ、
大きく掲載下さい。



中心ぶりがけ

1409

⑤ 2980P-1/3

第39表 天皇陵の所在地と墳形

天皇	所在地	墳形	備考
開化	奈良県奈良市	前方後円	△
崇神	奈良県天理市	前方後円	●
垂仁	奈良県奈良市	前方後円	●
景行	奈良県天理市	前方後円	●
成務	奈良県奈良市	前方後円	●
仲哀	大阪府美陵町	前方後円	*
応神	大阪府羽曳野市	前方後円	○
仁徳	大阪府堺市	前方後円	○
履中	大阪府堺市	前方後円	●
反正	大阪府堺市	前方後円	△
允恭	大阪府美陵町	前方後円	●
安康	奈良県奈良市	山形	?
雄略	大阪府羽曳野市	円	□
清寧	大阪府羽曳野市	前方後円	*
顕宗	奈良県香芝町	前方後円?	?
仁賢	大阪府美陵町	前方後円	*
武烈	奈良県香芝町	山形	?
継体	大阪府茨木市	前方後円	△□
安閑	大阪府羽曳野市	前方後円	●
宣化	奈良県橿原市	前方後円	△□
欽明	奈良県明日香村	前方後円	□
敏達	大阪府太子町	前方後円	△
用明	大阪府太子町	方	●
崇峻	奈良県桜井市	円	?□
推古	大阪府太子町	方	*
舒明	奈良県桜井市	方	●
皇極	(重祚して斉明天皇)		
孝徳	大阪府太子町	円	●
斉明	奈良県高取町	円	●
天智	京都府京都市	方	○
弘文	滋賀県大津市	円	●
天武	奈良県明日香村	八角	○

△ 墳丘の型式が天皇の順位とはなれている。

? 古墳として疑問、ほかに候補地を求めたほうがよい。

□ 付近により適当な古墳があり、検討すべきである。

* 付近に可能性のある古墳があり、検討の余地がある。

● 妥当なようではあるが、考古学的なきめ手を欠く。

○ ほとんど疑問がない。

1329

「古墳の発掘」森浩一、中公新書、146頁参照

443

前頁へ

もつとも、
とはいえ、
全ての天皇陵が五世紀頃の古墳

型式編年では、
古墳型式編年の陵墓が、
作ら

新旧さまざま、
古墳型式編年の陵墓が、
作ら

たようである。へ「古墳の発掘」森浩一、中

公新書、一四六頁参照

北九州の地に永らく眠り続けてきた歴代

天皇の御霊を畿内へ移すに先立つて、

各天皇の記紀における重要性

後代の天皇から見えて、直系かどうか

崩御の際の状況

等の諸条件が考慮され、墳丘の大きさ・高さ

形状・造出しの有無・周濠の数・築造場所、

などが決定され、畿内の各地に点々と

造営されていった。思われる。

つまり、こうしたわけで、現在の古墳の

型式編年と突きあわせて検討してみるとき

開化陵、仲哀陵、反正陵、雄略陵、清

寧陵、仁賢陵、継体陵、宣化陵、欽明陵、敏

達陵、崇峻陵、推古陵といった天皇陵は、

古墳があるように見えるだろうか。第39表「古墳

次頁8行。

前頁の表

ヤンソウ 紀上508[?] 紀下 46⁰ ② 2908⁰ 3/2

2,980⁰ - 3/3

守厚. 暗殺 紀(下) 456[?]

こと 不審 坂 109

の発掘し森浩一、中公新書、一四六頁、表

米



ういてまた、不審なことに、古墳うくな



墳丘をもつ天皇陵がある。(以下、「古墳



の発掘し森浩一、中公新書、一四六頁、表



たとえば、暗殺されたとされる日安楽天皇



陵、および日崇峻天皇陵がそうであ



る。



また、暴君として記されてゐる日武烈天皇



陵もそうである。



なお、先述のように



へ日東の日本国、武烈天皇および太



子・皇子は、日西の継体天皇によつて亡ぼ



され、仁徳天皇の皇系は武烈天皇で



絶えてしまったのであろう。



と推察される。(第四十八章へ仁徳天皇の陵



の項において既述(第一表参照)



さらに又、日顕宗天皇陵も、古墳うくな



ない墳丘をもつ天皇陵の一つであるという。



あるいは、兄・仁賢天皇よりも先に帝位に

山あふれた
宗のあり

2983
149

「続日本後紀」(黒) 155~156
2,981P 1/2
229-1/8
1114P
298-3/8
723P
2979-3/8

ついたという結果から、
顕宗天皇陵の
墳丘は、故意に、古墳らしくない形状とされ
たのかも知れない。
七世紀以降の人々が、意図して
このような古墳らしくない墳丘
を天皇陵と定めたのであろうと思わ
れる。
それにしても、一体どうしたというのだらうか。
不安時代の初期頃にはもうす
でに、天皇陵に混乱があったという。
第24回
「続日本後紀」に「こう記されているが
仁明天皇の承和十年(八四三)三月十八日、
省列陵で二度も山鳴りがするなどの
異変があった。そこで朝廷が図録を調べてみた
ところ、省列陵は二つあり、北が神功皇后陵
南が成務天皇陵であることがわかった。
それを世人は反対に伝えていたため、神功
皇后の山ありがあるたびに、むなしく成務天皇
陵へ謝りの使者を派遣していた。

天
改行

2193^P

新和(1)195^P

2,981^P - 2/2

219^P

229^P - 1/8

新和(1)10^P

阿倍朝臣秋重

新和(1)-194頁同文

「古墳の発掘」144^P

「荒筋」第三編「歴史改変」

先年も神功皇后の崇りがあったので弓矢を
作らせたが、これも誤って成務天皇陵へ献上
してしまっていた。
翌四月二十一日、参議従四位上藤原朝臣助
らを派遣し、南北の二つの山陵に陳謝し
た。
というのである。「古墳の発掘」森浩一、
中公新書、一四四頁。「続日本後紀」仁明天
皇の承和十年四月一日条。同四月二十一日
条参照。「荒筋」第三編「歴史改変」にお
いて既述。
なお、定かならないうまもない
が、この物語では、
①卑彌呼(神功皇后)の径百余歩の塚は、も
ともと肥後国合志原の合志の合地上に営ま
れた日京域の西北隅角部に位置する孤立
丘、横山の山頂に築かれた。(第13回参照)
②しかし、聖徳太子への金人の夢告以後のある
時、神功皇后は平城宮の西北方の佐
紀の丘に移された。(第24回参照)の神霊
と仮定して述べてきた。第三十四章へ径白

こと

嵯峨 淳和 仁明 843
794
百科 27-385P 49年

2.982P - 1/2

いにしへ
古 142 新(1)-195上

● 早くも天皇家の認識に混乱があった
ということになる

た五十年ほど一か経過一七おらず、宮廷中に
の文化が燦然と輝いていた時期である
と、いえる、平安京遷都(七九四)の時からま
ちっとも、仁明天皇の承和十年(八四三)

2981 1/2
1357

余歩の塚の項、他において既述
こうしたわけで、古を知っている世人は、
平城宮の西北方すぐの所に築かれた御陵(成
務天皇陵)を神功皇后陵であると早合点した
のではなからうか、写真図版 542 神功皇后陵 参照

2,982^P-2/2

↓ 池の中の黒い点をトル

・カラー

・頁の上半分に、
左右を限度一杯
はみ出させて
掲載下さい。



「新」(1) 194~5^P
平城宮から見て
西北方、佐紀の
丘へ移された。

中心ふりわけ

中心ふりわけ
1409

1309

↑ 1209

右め 奈良市山陵町 (平城宮の西北方、^{さき}佐紀^{おか}の丘)

写真図版 542 神功皇后陵

②192^P-3/3

『日本古墳100選』^{たけしけん}竹石健二、秋田書店、昭和58年1月15日3版発行、口絵参照、(写真図版)にも神功皇后陵を掲載している)

出あ 報
め 12行にも

2.983^P

あか いやま
筆め教う 17^P 事績

ニヒル
混迷 849^P
皇祖皇宗 747^P

2985-1/2
意い 識

天皇陵の認識に混乱が生じていたのである。
つまり、
はなはだ奇妙なことから、

「平安時代」初期ころ既に、

天皇の祖先達の霊が眠る墓所は、図録を
調べてみなければ正確には分らないほど、
混乱

となつてしまつていたし

と解される。

■いうまでもなく、神功皇后は、決して忘れてな

らなはいはずの偉大な皇后である。

■神功皇后は、

為（な）と
遂（す）げ

●日本の歴史上、極めて重要な数々の事績を

られたのだった。（既述）

●また、日本各地の多数の神社において、祭

神として祀られ、崇め敬われている。

■それなのに、神功皇后の御陵の所在地

が、朝廷内においてさえ明確に把握されてお

らず、他の御陵と間違われたという。

■推察するところ、

九州地方に点在していた数多くの天皇陵を、短期間

のうち、全部近畿地方へ移したので、

馬川梁 1657 新造 1156

2,984

あか
崇め
あか
崇め
えり
14年

新・やの 196上

そうして新しい陵墓の一つ一つについて正しく覚え込むのは、非常に困難であつたろうと思われる。

② そのうえで

△ 当時の貴族達は、日本書紀の虚構の背景となつてゐる真実の歴史を、まだ克明に知つてゐたものだから、天皇の祖先達の御陵として新たに造営された墳墓の取り扱いについてはいささか疎かになつてゐた。

と 想像される。

■ すなわち

↑ ↑ ↑ 天上の国（九州）の本来の神功皇后陵を、崇めつづけてきた貴人達は、

かいた新造の神功皇后陵には、心情的にいつても馴染めず「心の奥深くで」蟠り感じていたの（？）らう。何となくすっきりしない

と察せられる。

■ ともあれ

「平城宮の西北方の墳墓が神功皇后陵であ

る

といふただそれだけの認識か持たない世人
 は、誤って——平城宮のすぐ西北方に目
 にするところの成務天皇陵を、神功皇后
 陵だと勘違いしたように解される。
 しかるに世人へ世間の人へでなく朝廷の政
 を執り行なう重職をおびた者達さえ
 一図録を調べてみたところ、厩列陵は二つ
 あつて、北が神功皇后陵、南が成務天皇陵で
 あることが分かった。
 といふくらゐに二つの御陵についての明確な
 知識がなく——この当時、あやふやな思い込み
 よつて祭事を行なつていた状況が見て取れる。
 ■なお、こうした錯誤は、神功皇后陵と
 成務天皇陵との間だけに限られるもので、
 九州から近畿へ移された多数の天皇陵
 についても起つたことなのか、知れない。
 ほぼ同様に
 米
 を守る熱意が、さらにも近畿地方へ移された天皇陵
 を守る熱意が、さらにも希薄だったからであろ

知識
 認識
 2983P

うか

鎌倉時代になると朝廷は、天皇陵の管理

も、祭りも、中断してしまっただけ

のだった。へ「古墳の発掘」森浩一、中公新

書、二三頁参照

こののち世の中は、建武中興、南北朝の対立

南北朝合体と、めまぐるしい推移する

その結果としての南朝勢力の壊滅は、事実

上、公家政権の消滅を意味している。へ「日

本史」大阪教育図書社、昭和四十年六月一日

第一刷発行（一八四頁参照）

そしてまた長い戦乱の世が続いた

やがて戦国時代に終止符が打たれたものの、その時に

はもはや朝廷さえもなくなり、各天皇陵の

所在場所を忘れ去っていた。すっかり

こうして江戸時代を迎え、国学や尊王思想

が高まってゆくにつれ、天皇陵の所在地の

考証が盛んになった。

まず、多数の古墳のなかから天皇陵を選び

出すこと、国学者の仕事となった。

尚、歴代の天皇陵についての文献を、古事記

肉お
2版 4行

次頁!
あんい
安易

2,986^P-1/2

古墳の発掘 23
元禄1259^P
2083^P

日本書紀に延喜式などから抜粋し、その所在地を考証した松下見林の『前王廟陵記』元禄九年(一六九六)完結が、天皇陵に關する最初の著作であるとされている。(「古墳の発掘」森浩一、中公新書、二三、二四頁参照)

こうしたわけで、天皇陵考証の際に、誤って比定されてしまった天皇陵も、たぶん幾つかはあるだろう。

しかし、だからといって、よく考えられるように、すぐ近くに○○天皇陵 相応しい古墳がある。そちらの方が本来の天皇陵なのであらう。

といった考え方をするのは、あまりにも短絡的すぎよう。

■ もーもー、
「古墳の形式や、埴輪の編年が、天皇の在位時代と合致するから」というただそれだけの理由によって、天皇陵

562, 2.9 ㊤
411.4.14 ㊤

H30(2018)8.2(木)~8.3(4回)

H31(2019)2.23(土)~2.24(3回)

令和元(2019)8.1(木)~8.2(3回)

令和2(2020)3.16(月)~3.18(4回)

令和2(2020)11.25(月)~11.27(4回)

11/27 1F 11/26

2.986⁰-¹/₂

さいこう
再考 856

まいえ
危惧 520

ゆね
上塗り 221

安易 880
わらい ことの上に
エラにわらい ことを重
ねると

を安易に変更するならば下
へ過ちの上塗りをする(ことにもなろう)✓
と危惧される。
推古朝より前の天皇の陵墓とされていり古
墳は、――聖徳太子の理想に従い新し
く作られたものなのかも知れない
という、その可能性を踏まえて再考しなけ
ればならないと思われる。

*